

第一号



付来ゆと桜貝と海光るわが故里

鵺沼

鵺沼古語研究会

昭和五十一年七月三十一日発行

鵜沼の今昔

日本で最も気候温暖にして、空気も清く別荘地として昔から知られている鵜沼は、現在京浜工業地帯の衛生(マ)都市として、日毎発展している。藤沢市の中でも殊に住宅地としては最高の土地であることは誰しも知っていることですが、鵜沼は昔はどんな土地であったか、歴史をもといてみるのも一寸興味深いものである。それ故この鵜沼公民館に「鵜沼を語る会」が出来た訳です。興味をお持ちの方々が一堂に集り研究しております。

詳しいことはわかりませんが、おおよそ四・五千前から人が住んでいたようです。それは江の島の燈台のそばの土地から掘り出された土器が縄文式の中でも早い時代に作られた田戸式のものであることから考えられます。鎌倉室町兩時代に、鎌倉の外側に近い町として藤沢、鵜沼が発展し始めた。寺や神社もこのころ建てられてきたようだ。寺、神社、古

い家等時代を追って並べてみると、平安時代終りまで(一、一九二年) 五五二年江の島神社、七二三年片瀬諏訪神社、八五三年江の島中津の宮、九〇七年大庭神社、次に鵜沼皇太(マ)神宮、一、一五年鵜沼高松家(修験・法印と称す)一、二三年鵜沼斉藤家、一二四五年鵜沼万福寺、竜口寺、一三二五年遊行寺、江戸時代の始まりまで(一六〇二年)一五二八年鵜沼普門寺、一五五八年鵜沼空乗寺、江戸時代の終りまで(一八六七年) 鵜沼真源寺、一六六一年鵜沼法照寺
これら鵜沼を中心として一部あげてみたのであるが、この時代は文化もおくれており、記録も充分でなくはつきりしていない。

地名の起源 昔鵜沼は、沼地で僅か東北に丘があり、ここに鵜沼の皇太神宮が在った。

この附近が鵜沼住民の祖先であり、南方海浜に近く、不毛の地と丘の間に沼があり、鴻が群集し繁殖したとつたえられている。鴻は鵜に通じて、鵜沼の名称の起りであるとも伝えられている。

ここで鵜沼皇太神宮と山車について 毎年八月十七日は皇太神宮（神明宮）の祭典の日である。鵜沼の地名はすべて皇太神宮を中心として名づけられ、例えば上村（神村）、刈田（神田）、宮の腰と云い宮の前、方位で大東等。祭典の日には九部落からの山車が烏森に整列しわずか二時間位で雄大な祭典は閉じられるが関東には、まれにみる祭典である。

鵜沼の別荘地 青松白砂の景観美を誇る鵜沼は、明治三十年頃より開拓し天下に知られるようになった。この頃江の島棧橋が全長完成、今の江の電が明治三十三年に創立し三十五年藤沢・江の島間営業を開始した。四十一年には、鵜沼村、明治村を併せ藤沢町となる。

小田急が昭和三年土地買収に着手し、江の島線を昭和四年に開通させた。交通の便が完備し東京へ五十分となり、今では、江の島をひかえ東洋のマイアミと称し、昔は想像もできなかつた。鵜沼もめざましい発展をして来ました。

余暇をみて、もつと確実な記録をと思いながらそれもできず断片的な事を並べて筆を置くのも残念です。

前鵜沼公民館長

高松敏夫



松露と防風

伊藤 昌

嬉しく心待ちにしていた一人でした。しかし、その会をまさか私が世話役のような形で進めていくことになるうとは、その当時には夢にも考えてはおりませんでした。

しかし、なんとなく引受けざるを得ない雰囲気になるにしたがって私は事の重大さに慎重にならざるを得ませんでした。

それから一年、私は、一、二回会合を開いただけで沈黙を守りました。私は、いま、経済的基盤の弱い海のものとも山のものともわからない誰も引受けなくてもない仕事は必ず

私にお鉢が廻つてきました。私は貧乏くじとは知りながら喜んで引受け情熱を燃やしてその小さな命を育てるような会を育て、まいりました。

しかし、それは、いはば名もなき小さな会であり成功しても失敗しても社会的には、あまりたいした影響はありませんが、しかし、「鶴沼を語る会」はそうはいきません。

どうしたとしても成功させなければならぬ。しかし、鶴沼を見る事なく消滅し、私はおそらくその破壊

失敗したら鶴沼とゆう文化財産は永久に陽の眼をみる事なく消滅し、歴史の中に大きな汚点のみを

残すことになるのです。さらにはラク印を押され、歴史の中に大きな汚点のみを

幸、この一年間鶴沼公民館建設委員会の活動があり私は委員の一人として参加し、鶴沼

「鶴沼を語る会」の発足させてもらいました。私は、この一年間に時を稼ぎつ、必死となつて

なき。鶴沼文化はまさに幻の文化です。しかし、その影響力は、はかり知れなく大

な感。は、整えての町並み、鎌倉は、その発生当時から政治都市文化都市として、その圧

迫感。は、整えての町並み、鎌倉は、その発生当時から政治都市文化都市として、その圧

文化遺産、資料もどこから始め、藤沢の一僻村にすぎず、資料も何もありません。それに比べ

私はまずどこから手をつけていくべきか、このため一年の歳月を必要としたのです。私は藤沢は三十数年前から知っておりす。高座郡藤沢町時代からですからかなり昔の事になります。

私は昔の藤沢は美しかったし今も美しいと思つています。特に鵠沼海岸は緑も多く右に富士、正面に伊豆半島と大島そして左手には緑濃い江ノ島が映え晴れた日などさらに三浦半島から城ヶ島まで望む事ができます。

私は父が職業軍人でありましたため少年時代より転々として全国を歩きましたが、小学校は藤沢小学校、中学校は県立湘南中学校にいた時代があります。小学校時代は、片瀬海岸から鵠沼海岸、引地川河口でよく遊びました。海水浴にボラ釣りにそして松林の連なる海岸での松露の香りや鵠沼海岸から辻堂海岸にかけて咲いた防風の哀愁をこめた華やかな花々は今も強烈な印象となつて鮮やかによみがえつてまいります。

中学時代は軍事教練と軍需工場の合間に引地川の河岸に寝ころびタンポポやスミレをみては流れゆく白い雲を眺めていたものです。いわば、引地川と鵠沼海岸は私にとりましては青春であり人生そのものでした。三年前私は二人の男の子のゼンソクがあまりに激しいため幼い時遊んだ鵠沼海岸ならと考え取手市から移転してきました。そして毎日引地川を眺める事になりました。私にとつて新しい口マンと行動が始ることとなりました。

私は引地川の油の浮いた重苦しい流れを見た時まさに慄然としました。東京や大阪の黒い河をみながらいる私ではありましたが引地川だけは、昔の美しい川であると思ひこんでおりました。

私は、最初に昔の藤沢は美しかったし今も美しいと思つていと書きましたが、その言葉の中には多分そう思いたいとゆう願望のみかもしれません。

引地川だけではありません。松林は枯れ、緑は白っぽく海岸は荒廃そのものでした。松露などは一個だになく、防風の花は一輪も咲きませんでした。

故郷を持たない私にとつて、藤沢は故郷であり青春であり人生そのものでした。それを奪われようとした時、私には激しい怒りが燃えあがり私を行動えとかりたて、いつたのです。

私は三年前、鵠南小学校のガリ版ずりの機関紙に「引地川のボラ」とゆう一文を載せさ、やかながら引地川の美化運動を宣言しました。しかし、それは読む人にとつて

はあまりにも現実離れした狂人の「たわ言」としか受け取れなかつたかもしれませぬ。しかし、私は着々と準備を進め、昨年六月まず第一歩として鵜沼海岸より辻堂海岸にいたる三軒の清掃運動にふみ切つたのです。その事は同封の資料により御判読下さい。

しかしながら、出発の時点において、そこに立会つたすべての人達はその可能性を信ずる人は一人もいませんでした。まさに荒廃した海岸、荒廃した人の心をみせつけるような塵芥の山でした。動物の死がい、重油のかたまり、プラスチックの山、さらに流木の山又山でした。」

これは昭和四十八年四月三十日 前神奈川県知事津田文吾氏に提出した「引地川河口浚渫並に浄化に関する陳情書」の中の抜粋です。

あれから丸三年、引地川は見事により魚が群れをなして泳いでおります。私はあの時海岸の荒廃の中にみたものは、やはり人間の魂の荒廃であり文化の荒廃でした。

松露も防風も消えてしまった。しかし、それを知っている私は幸せであつた。あの自然が醸し出した美しい色彩と放香はふた、びはもどらないけれど、私が生きている限は私の心生の中に残る。そして、やはりその素晴らしさを私は伝えなければならぬ。消えてゆくもの、失つてしまつたものは惜しむだけではない。一度せめて心の中にだけでも蘇みがえさせねばならない。私は手あたり次第でもい、片っぱしから集め、そこからふたたび新しい生命をよびもどしてみようと決心したのです。

鵜沼が砥上ヶ原と呼ばれ平家物語、源平盛衰記、西行記等々にその名が現れているのを知り益々この荒漠とした砂浜に愛着を感じたのも鵜沼をそんな眼でみつめ出したからです。

平家物語の中 文治元年（一一八五）降人平宗盛（マ）の東下りの中に

「足柄の山をも打越えて、こゆるぎの森、鞠子川、小磯大磯の浦々、やまつと（八松）（マ）砥上ヶ原、御輿崎をも打ち過ぎて、急がぬ旅とは思へ共、日数やうやうかさなれば、鎌倉へこそ入り給へ・・・」と、
あり平宗盛（マ）が生き恥をさらしつ、死刑の待つ鎌倉にどんな気持でこの鵜沼の原を眺めつ、通つていったか人生の無常を描いては平家物語の右に出るものなしと言われているにしても、それが八〇〇年前こ、鵜沼を通りぬけていったと知ると一人哀れであつたのです。西行は武士を捨てて全国を行脚し、多くの名歌を残した事が

知られているが、

「心なき身にもあはれは知られけり鴨立沢の秋の夕ぐれ」の鴨立沢のそばで、西行物語に相模国大場と云う所、砥上ヶ原を過るに、

野原の霧の際より風に誘れ鹿の鳴く声聞えれば

「芝まとう葛のしげみに妻籠て砥上が原に牡鹿鳴なり」とあり西行も鵜沼で妻籠う人間臭い歌を詠んでいるのも因縁かもしれないのです。

辻堂から堂面、八松、八部、藤原の地名はすでに、鎌倉時代からあり、鎌倉への入口の街道として多くの出来事が発生したことであろうがそれが全く歴史の砂の中に埋没してしまつたことは本当に残念な事です。

いま、での日本の歴史は支配者の歴史であり支配者のための歴史でした。民衆の歴史はほとんど残っていません。おそらくマツ殺されてしまつたのでせう。民話も寓話もその伝承の中に時の権力が干渉し正しく伝えられてはいません。しかし、そんな歴史の所々にどうしても裏返し民衆の歴史を伝えたい箇所があります。

鎌倉將軍頼朝八的原に怪事に逢給ひし事。保暦間記に見えたり。
建久九年の冬。右大將殿相模川の橋の供養に出て遷らせ給ひけるに。八のが原と云う所にて、亡されし源氏義広、義経、行家以下の人々の怨霊現して。將軍目を見合せり。とありますが、時の権力に対する反抗を肉親の亡霊での復讐に託した民衆の心がよくわかります。

鵜沼は明治末期から大正にかけ文化が花咲きました。別荘文化でありブルジョア文化と言われるものでした。芥川竜之介に象徴される不安な砂上の楼閣のような、真夏に咲いた華やかな仇花でした。若し歴史に残るとすればやはり、そこに住んだ住民の歴史は残らなかつたでせう。しかし、この鵜沼の文化を仕掛花火の如く一瞬の残照として消さないためには、こゝに住む人々の生活の歴史をつながなければならぬと思うのです。

私は歴史家でも評論家でも文芸家でもない素人だけに盲蛇におじずでいまままでにない方式でこの「鵜沼を語る会」を進めていく決意です。そして一人でも多くの素人の集団となり新しい鵜沼を創造していきたいと考えております。ご協力をお願い致します。

(昭和五十一年七月二十七日)

鵠沼の歴史

歴史、伝記はこの国でもそうであるが権力側の記述である。時代の変遷により前の権力者が倒れると時の権力者により歴史は都合のよいように書き換えられ、没書、焚書はあたり前の事であった。

民衆の歴史はほとんど口伝、伝承でありその正確さは期待できない。しかも文化も一種の流行的色彩が強く、たまたま有能な歴史学者考古学者の出現により特定の場所がライトを当てられるにすぎない。前述が長くなつたが、鵠沼に関する歴史的系統立つた資料は何もない。結局あちらこちらの文献資料をつなぎ合せはぎ合せて作つていく以外に方法がない。しかしそれだけに私としては一つの創造的意欲とロマンを感じる。

従来 of 難しい記述をやめ思い切つて新らしくそして楽しい歴史を作つていきたい。

非難、批判もとより御自由、毀誉褒貶もとより覚悟、たゞし、多くの人達と語り合ひどんな小さな出来事でもこれがやはり人間の歩んだ尊い足跡と、大切にして記録していきたいと考えている次第である。



鵠沼の名称は

天平七年（七三五年）の相模国天平七年封戸租公易帳とゆう正倉院に保管されている文書にみえる。

その頃書かれて残されている風土記は常陸（茨城）、出雲（島根）、播磨（兵庫）、肥前（佐賀）、豊後（大分）の五風土記よりなくこの正倉院の記録はかなり古く貴重なものとなる。

その頃の政治組織は郷と呼ばれる集団の集合体であり

奈良時代は 三、七六八郷、人口 五百五八万六千二百人、一郷平均一、四八二人となり平安時代の末期となり一、一〇〇年代に始めて鵠沼郷の名がみえその頃は方瀬郷があり中世の初め腰越駅が置かれたとある。（九一〜九八三）

藤沢市は 土甘（つちあま）郷と呼ばれさらに土柵村の中に下土柵（藤沢）上土柵（綾瀬）に分かれており、かなり広い地域に少数の人口が分布されていたらしい。

鵠沼を語る前に藤沢の歴史を簡単に

調べていきたい。

藤沢地域の開発は、人類の文化の発達が示すと同じく小さいながら相模川左岸、引

地川沿岸、境川沿岸の河川沿いに

縦割り地域に弥生式稲作農業が起

った。(前二〇〇)



引地川流域集落は

一、大庭文化圏 大庭の武内社大庭神社

を中心とし稻荷台地を右に左に小糸谷

大庭城山 折戸と横穴墳墓が五基残

存しその跡を証明している。

二、は高倉文化圏であり

その横穴は山内 高麗山 片瀬山

姥ヶ谷にみえる。

境川は高倉川と呼ばれ多加久良を

経て高座(たかくら)となり高座郡の前

称となった。

高倉の名は七一六年武蔵野国高麗郡か

ら(入間郡)一七九九人が高倉氏に引率され

移住したと言われている。

高倉氏の前身は(三〇〇)四〇〇)朝鮮に栄えた高

麗の一族が大和朝により主として関東

に帰化し文化を伝えたものであり、

七四九高麗福寿の孫福信の名が

みえ七七九高倉に改称したとある。

藤沢地方はまた秦氏が住んだとも伝えら

れ秦、秦野の名もこれに由来すると

も言われている。



住民の生活

住民は田地の生産者としていわば米作職人としてしか扱われず律令制度時代においては班田農民として

平安時代の貴族の生活を支えた荘園制度においては荘民としての生活を強いられていた。

班田は戸単位となり一戸の人口構成は一戸平均一九・五人であった。(七〇二年)

内容は一 五才平均三・二人、六才以上の

班田給付年令は男七・九人女八・四人で

一戸平均二〇人すなわち非班田給人三人

男八人 二九石三斗六升

女九人 二九石 二升五合 であり

これで見ると食米に関しては相当豊かであったにもかゝらず実情はひどいものであったらしい。

綿もなき布肩衣の海衣(襦)の如わけさ(が)れる か(か)ぶ(ぼろ)のみ肩に打ち懸け「略」

土間に藁を敷いて起居し、

こしきには蜘蛛の巣捲きて飯炊ぐ

のを忘れた」とありそれにもかゝらず

租の催促を受けた。

鵜沼片瀬地区は開発がもっとも早く進ん

でいたと言われ、鉄製の釣針、片瀬のスクモ塚の直刀、二ツ谷横穴古墳の鉄

鍬等が知られている。

調として米に換算されたが

鍬一具の値は稻三束(一斗三升)で

あったからかなりの評価があったといえよう。

調・庸の首位は布であり、

天平勝宝元年(七四九)方瀬(片瀬)郷

から奉進された調庸布裂地は正倉

院御物として保存されている。

その他よくもこれだけ中央政府は調べ取

立てていたと思うほどで、次に列挙して

みる。

鉄、鍬、塩、あわび、かつお、海藻

防風、蘇、紙、紅花、にお、

あかね、あわび、ひいらぎ、よもぎ

野芹、くこ、うるし、たちばな、やまぶき

やまといも、あさのみ、さらになつとつ(塩なつとつ)

の類まで多種にわたっている。

かつお

特にかつおは江ノ島の沖合は湘南
第一の漁場であり材木座、坂の下、
越、片瀬、江ノ島、鶴沼、辻堂は
六村一島の入会漁場権があり大
きな収穫があつた。

この島の一つ宝や初鯉の句
がある。



律令体制にあつては

貴族官僚の独善の時代であり平安

時代はまた権門勢家の独走時代

であり庶民は浮かび上る機会がな

く全く歴史的史観となるべきものはな

に一つない。

しかし地方の豪族はそれなりに自己保

全を計り宗教、権門の力を借り力を保

存しつゝ、蓄えていった。

藤沢地方は大庭御厨と呼ばれこれは

後ほど述べるが独力で力を保つ事のでき

ない地方の豪族が巧みに生き伸びていった

卑屈な智恵の典型の一例であつたがこれ

をみるといかに弱肉強食の時代であり、

庶民がどうやって生きていったのか想像できるの

である。(つづく)



文献集遺集

昭和初期の鵠沼

鵠沼は東海道線藤沢駅の南側一帯をいう。私の生れた頃の鵠沼は湘南の最も静かな別荘地であつたらう。一面の麦畑と桃畑、お百姓さんの家の集落、ひとつかみの漁師の家、そして海岸沿いの松林の中に殆んど夏だけの別荘があつた。冬通して住んでいる人は転地療養者位のものであつた。

芥川龍之介さんや矢代幸雄さんが療養しておられた頃である。

(芥川竜之介は(一九二七年)自殺)

私たちは、別荘の住人ではなかつたが、私が小学校の頃友だちは私のことを「お別荘の子」といつてよそ者扱いにした。

祖父の晩年に建てた大きな邸宅も、その後父の建てた家も土地の人々から畏敬と羨望の目でみられていたこと、思う。

庭の好きな父は邸の半分を池とした。舟を浮かべ、島の燈籠には灯をともした。離れの端縁から釣りも出来た。遠近を問わず集めた美しい石のたぐずまい所を得て枝をひろげた庭木の四季とりどりの美しさ、裏庭の果樹園茶畑。そして子供達に最も思い出深

いのは黒いつやつやした椎の実の落ちる頃、



土地を拓き、道路を敷き、水道ガスと父の仕事は着々と進み、住宅地としての鵠沼は発展していった。学者、文筆家、政界、財界人が移り住み、横須賀が近い関係で海軍将校も多かった。

春の夜の部屋あたたかに

いつのまかふりいでし雨のけはい

ひそけし

御元旦には勲章をいっばいつけた正装の將軍たちが御年始にいらつしやるのが楽しみであった。

しかし、幸せな子供時代は短くて世界的恐慌が我々の生活にもひびいてきた。

手を揚げすぎた父の事業、それを成功させようと次々にする投資は悉くうまく

ゆかず、借金は借金をうみ、膨大の土地への税金でがんじがらめの状態がつづいた。母は三十代も歩みきれずに死に、

父は四十代からは殆ど病気で、大きな家もやがて人手にわたり、転々と部屋

を借り家を借りて住んだ。

私の歌はこの頃から始まっている。母が死んでから父と暮した十余年の月日は決して短いものではなかった。

どこまで落ちてゆくのかわからぬ不安な暮らし、電燈も、水道も切られてしまったこともあった。

しかし一番辛かったのは貧乏になりきれぬ父とそのアルコール中毒であった。

贅をつくした半生とずばぬけた才能と、そして最高の教育が邪魔になって

小使にも別荘番にもなれずに酒の力を借りては気の利いたことを言っている父を我

々兄弟はどれ程怨み憎んだかわからない。それでも尚、父が哀れであった。

その父も逝き何年も経った。

そして今鵜沼を思ふ時、苦しかった年月を越えて幼い日のことばかり思い出す。

トランプやカルタで遊んでくれた父、歌や俳句の手ほどきをしてくれた父、

そして背の高い父の腕にぶらさがって歩いた箱根の山や伊豆の山々、朝日や夕日をみに行つた鵜沼海岸を私は忘れる

ことが出来ない。

高瀬通りの名の残る高瀬家の

(歌人高瀬笑子氏の歌集

鵜沼より)

われを送りて

日の出橋まで

来し人の

浜の暮色

につつまれ

にけり

歩みきて林の徑に

暮にけり

潮騒の音近く

ひびき来



昭和十八（十九）二十年頃の鶉沼の花々

ひまわり

さて ひまわりといえは誰もゴッホでせう。睡蓮といえはモネのように。
そして私は、ひとつの小曲を思い出します。

ゴホのたいよう

くるくるまわれ

チコの写真が

うつるように

ゴホの太陽

くるくるまわれ

パパのみちが

乾くように。



これは明治、大正、昭和初年にかけての抒情を求める人々に愛された画家であり詩人であった。竹久夢二の作です。チコというのは画家の次男で、母に去られたチコは父の放浪の旅にはいつも、ポケットに入ってゆくように、ついて歩いた子供でした。このチコの不二彦さんがこの頃ときおり、夢二の絵の再評価に伴ってテレビジョンの画面に姿を見せています。恐らく夢二の亡くなった五十そこそこの年令に達していられるはずですが、何と晩年の夢二とそっくりでせう。……

例の有名な「待てど暮らせど来ぬ人を」の歌詞生れた。京都での夢二にとって生涯ただひとりのほんとの恋人であった女性との生活。その短い幸福（その人は病死）の直後ではなかったかと思われます。私は何十年間もの間、ひまわりの花をみれば必ず、ゴホの太陽くるくる廻れ、と口ずさみ、ついでにチコの太陽くるくる廻れと勝手に付け足します。

さて私がひまわりに囲まれて過ごした夏は、昭和十八年と九年と戦争が厳しくなつて来た頃でした。

湘南鵠沼にいました。小さい家は百坪ばかりの庭に囲まれていました。その東西、南の垣に沿つてぐるつとひまわりの種を蒔いたのです。

砂地の好きな花と見え、実に丈高く幹も太くなつてアポロを思わせる大きな花が咲き並んだ風景は華麗と言いたいところですが、この花は不思議にどこか鄙びて、花の大きい割りに質素に見えるのでした。花蕊が焦茶色の実になると、毎朝、渡り鳥だが、もずだかがつつきに来たのを思い出します。

華麗ではなくとも愉しさに変わりありません。

築山風起伏ある庭は、ひまわりに囲まれて、山百合が匂い、百日草が

大輪で油絵の色彩に花の群舞を見せ、秩父の山から芽を掘ってきたキツネノ

カミソリも橙色の花をつけました。



すすき薄がうす紅色の穂先を揃えて近い秋を待つていました。その薄が黄色から銀になり、やがてほうけそめて、ひまわりが、しぼんでしまつと、庭は全くその全貌を変えたものです。

花のごく小さい黄金色の菊でした。それは江ノ島で春掘つてきた株が殖えて思いもよらぬきよらかな花を咲かせて、庭中を占拠してしまつたからです。

ちびのくせに、大輪の丈高いヒマワリより遙かに華麗に庭をいろどり輝かせたのでした。垣根の蔓うめもどきが珊瑚玉のような実を気前よく鳥たちについばませていたのも、その頃でした。

鶴沼とゆう町は松林の中にありましたがとにかく小径までが花だらけで、まるで花の中に人家がぼつんぼつんと坐っているようなところでした。今はもうそんなゆとりもなくなつたことでせう。

ついでに五月前後の花も思い出して下さい。戦時中なので、魚屋とか八百屋とかへ配給品をとりに行くのです。配給などというゆとりのない買ひものをしに出かけるのに、一歩家を出ればもう右も左も上も下も花だらけでした。



藤、薔薇、木蓮、えにしだ、雪柳、チュリップ、ひなげし、紫つゆくさ、垣根には
 なにわいばらの花の白、まだきゃしゃな筒状の花の忍冬の濃い匂に、あやめ、浜
 えんどう、昼顔、次第に宵待草が群をなして炎とゆらめき、松林の中には銀色
 に波打つのがつばな、どこともなく匂ってくるのが椎の花。も少しさかのぼって
 三月には桃畑が水彩画のような色どりをを見せていました。
 そう数えたてて、その鵜沼からやがて秩父の山村に移ってからの、やっぱり花
 に満ちた朝夕を思い浮かべれば、実に私は花に恵まれたしあわせもの
 だと、いまさらのように感謝せずにはいられません。ひまわりの花がすっかり
 横道にそれてしまいました。(詩人城夏子美しき花ものがたりより)



鵜沼海岸と海水浴



水泳の歴史はきわめて古く原始時代においては重要な生活手段として重要な生活手段として、後には戦闘手段として、また漁師のように職業に結び付いて発達してきた。

それに反して今日のような競泳を主とした泳法の歴史は非常に新らしく一、八七三年、イギリスに現れたのが最初といわれ、クロー・ストロークにいたってはさらに新しい。

日本では平安時代は水わりと称し、武家時代は明治末期まで

水練、水術などの名のもとに護身術として発達した武技の一つとして

江戸水府流、江戸向井流、伊勢観海流、紀州能島流、熊本小堀流などそれぞれ独自の特色を生かして発達した。

明治時代になって日本独自の泳法を統一しようとする運動が起こり

小拔手、二重伸、中拔手など立派な泳法が完成された。

海水浴と言われているものは、明治六年本所の海が最初であった。

明治十三年函館で塩水プール、須磨、明石に海水浴場、明治十八年大阪の海水

浴場が開かれたが、明治二十一年七月十一日男女別泳となった。

片瀬、鵜沼海岸
高島吉三郎の「海水浴、付録海水浴場略案内」によると

鵜沼

片瀬江の島より十町を距わさる浜続きの海岸にして、地勢平穩、眼界曠濶なり。此地引地川の清流に包まれ松林の翠影中に別荘、旅館の点々散在するのみにて、漁民舎屋稀に 鶴犬驚かす空気が清浄なり。

藤沢停車場より約一里、旅館は鵜沼館、東屋等を最も広壮のものとする。

とある。

特に東屋旅館は鵜沼海岸の開拓者であった伊東将行が明治二十五年に竣工させた施設であったが鵜沼文化の発祥と発展は東屋を中心として展開していったと言っても決して過言ではないこれを自分達の手で少しづつ発掘していつてみたい。



あとがき

未来の事は誰もわからない。しかし過去の事はあるていどわかる。いや、知っておかねばならない大切な人間の歴史が数多く打捨てられてある。どんな小さな道標一つにも過去と未来を結ぶ接点となる。

私も、一つ一つこの鶴沼の砂の中、川の中から拾っていききたい。あるいはもう失われてしまった砂浜の貝からでも、それを発見した時未来が見通せるかもしれないぬ事を信じて、どんな資料お話でもよろしいですからお寄せ下さい。

伊藤

昭和五十一年七月

藤沢市鵠沼海岸二丁目一〇番三号

藤沢市立鵠沼公民館内

鵠沼を語る会発行

電話（36）七四三一